



新連載 岡田隆介

過去に二度ほどシリーズを書いたけど、正直、苦痛だった。文章を読むのも書くのも好きじゃないということを知った、それは今も変わらない。

で、ふと思った。そんな人はいっぱいいるだろう、だったらそういう人が対象のシリーズがあっていい。ターゲットは、対人援助マガジンの目次とページ数でめまいがする読者だ。

目指したのは絵本だが、肝心のイラストや漫画が描けない。で、パワポを使ったエア絵本にした。文章の何倍も時間がかかるが、暇のある自称パワポ芸人だ。

「ビジュアル系 子ども・家族の理解と支援」、ネタ・根気・寿命のどれか一つが尽きるまで、緩く続けてみたい。

新連載 岡田&団

編集長の私が、岡田隆介さんと共同の連載をはじめた。

グラフィック メディシン(GM)との関わりは、本文前書きのところで触れた。新たな描き方でマンガの新作を創れるのが楽しい。今回の作り方は二人のラリーである。

いろんな場所に、新しい形式を作り出していくのが面白くて仕方がない。そこには

いつも、あだ花にしないための継続への思いが重なる。広げた店を、命続く限りと思いつながりながらこなしている。

こんな感覚になったのは七十歳を過ぎてからだ。古くさい不要品だと言われないう、何事によらず、ゆっくり考えて歩み出したい。

こちらの不定期(?)連載についての岡田さんのメッセージは、記事の最後に。

第二回 一宮 茂子

私は大学病院に就職して間もないころ、何回か甲子園の全国高校野球選手権大会で救護班のひとりとしてバイトをしました。100 回目となる今年は多くの感動ドラマが生まれました。とくに秋田の金足農が次々と強豪高と戦って準優勝するまでの過程は漫画以上のリアルドラマでした。

一方、カンカン照りの猛暑で熱中症の危険性もあり、球児たちや応援団、観戦者や大会関係者の皆さまの健康状態がとても気がかりでした。主催されている朝日新聞社と日本高等学校野球連盟さん、来年は何らかの対策をお願いしたいです。

第二回 松岡 園子

「グループホームで暮らせないかな…」

今年の 1 月に入院した母が退院後につづやいた一言と、私の心の中で実家をグループホームにできないかという思いが芽生えだした今年 3 月。

色々調べ、動き、7 月によく運営法人となる組織が NPO 法人として神戸市で認証されました。初めは、実家を改修して…と考えていましたが、市の担当の方と話している内に、国の補助金を受けて新築できるかもしれないということになりました。考えもしていなかった方向へ進んでいきますが、面白い展開です。チャレンジしてみようと思います。

週 1 回通っている小説教室がとても楽しいです。20 代から 90 代までの方が、小説や詩、エッセイを書こうと連日連夜、奮闘しています。50 代以上の方が圧倒的に多く、人生経験が豊かな方々のお話を聴いていると、世界が広がっていくような気分になります。

クラスゼミは、毎週「合評」と呼ばれる 2,3 作品の批評を軸に進んでいきます。戦後の体験を書き残そうとしている方や、自身の病気の体験を物語に織り込み、作品に仕上げている方もいらっやいます。そんな方たちの創る物語を毎週読ませていただいていると、私の体験なんてまだまだ、苦労の内に入らないなあと思わされるのがたくさんあります。

第二回 中條 與子

前回の6月15日号から、あつという間の3ヶ月だった。地震、大雨、猛暑、そして台風と、たてつづけに起きた。

震災の時、電車が動かなくなり、線路の上から職場まで歩くことになった。もちろん職場に行かず、家に帰るという選択肢もあったが、職場まで約3キロ、自宅まで約30キロ。必然的に近くの職場に行くことを考えた。幸い、所持しているスマートフォンのバッテリーがあったので、ナビゲーション機能のアプリで、3キロ歩けば行けるということがわかった。そして、夕方になって電車が動かなくなったら、家に来ても良いと声をかけてくれる友達もいた。心強い気持ちで街を歩くことができた。

土地勘がなくても、迷いながらも、人に聞きながら歩いていくと、いつも見る建物、緑色の看板が見えてきた。それを見て、職場の近くに近づいていることを知ることができた。それでも電池があれば行けていたが、電池がなければ、職場に辿りつけた自信がない。

私にとってスマートフォンは欠かせないものであるが、スマートフォンに頼らないで目的地に行ける方法も、不可能かもしれないが、考えたいと思い始めている。

杉江 太郎

とある都道府県の、とある児童相談所で働いている杉江太郎と申します。今回は 3 回目となります。よろしくお願ひします。

最近小川糸さんの「ツバキ文具店」と「キラキラ共和国」という小説を続けて読みました。とある代筆屋さんのお話で、その代筆屋である主人公が依頼を受けて手紙を書く際に、その代筆依頼に応じて、

内容はもちろん、便せんなのかはがきなのか、ペンなのか筆なのか、それとも万年筆なのか、字体は、字の色は、切手は、封筒は……と無数の選択肢の中から、「これ！」というものを選び書き上げるといふ、まさに「読む側にどう伝えるのか」ということを考えさせられる小説でした。

まさに私にとってのこの対人援助学マガジンも同様です。皆さまにどのように伝わっているかはわかりませんが、メディアで叩かれているように、児童相談所の仕事は、ツライだけではありませんよ。どんどん権限だけ与えられて締め付けが厳しくなっているような印象はありますが、きちんと「相談機関」としての余地が残っていると思っています。そんな余地を大切にしながら今日も生きています。

迫 共

社会福祉に関係のある漫画を題材にしたドラマが、同時期にふたつオンエアされています。『健康で文化的な最低限度の生活』(原作、柏木ハルコ)と、今回とりあげた『透明なゆりかご』です。



漫画を実写化してドラマや映画にする場合、どこまで原作に忠実にするかという問題があります。原作の枠組みを大きく外れると原作のファンが怒るでしょうし、逆にまったく同じでは発見がありません。絵だからできる表現と、生身の人間だからできる表現があります。ふたつの漫画とドラマを見比べて、表現のあり方について考えたりしています。

朴 希沙(Kisa Paku)

フィンランドに来て約2ヶ月が経とうとして

います。今までとは全く違う場所に行くと、時間がたつのが長く感じられます。もう半年も経ったような気分です。フィンランドは本当に森と湖がたくさんある国で、不思議な静けさが漂っています。ここで過ごしていると心が落ち着いて、今までのこと、そしてこれからのことについてじっくりと考えることができます。たまには、日常を離れて旅をするのも、いいものなんですね。

浅田 英輔

国家資格となった公認心理師。9月9日に第1回試験が行われ、私も受験することにした。これを書いている8月末はまさに受験勉強追い込みの時期なのだが、そういうときこそ原稿がはかどりますよね！

三浦 恵子

6月の大阪地震、そして7月の西日本豪雨災害など、被害に遭われた方に心からお見舞いを申し上げます。

西日本豪雨災害の直後には所属している複数の職能団体で災害対策本部が立ち上げられました。私自身も後方支援の一端を担いながら現地入りをする会員をサポートすることを息長くやっていきたいと思っています。特に西日本豪雨災害は、被災地域も広域にわたることもあってか、全国ネットによる報道から情報を得ることは難しい現状です。現地で地域活動を様々に行っている知己を通して、現地のニーズを汲み取りながら、それに応じた支援を続ける必要性も痛感しています。

思えば20代から様々な活動に参加する機会に恵まれました。自分が企画しどんどん事業を進めていった時期もあります。「まず自分が動く」ことから少しずつ「支える人を支える」というスタンスにシフトしていくきっかけは、平成23年3月11日の東日本大震災でした。

震災直後のGWに被災地に入るボランティアに登録したものの、直前に転倒事故に遭い一時期杖歩行となってしまいました。申し訳ない気持ちで一杯になりながらその旨を事務局に連絡した際、担当者とお話しする中で、「支える人を支える」支援の在り方について示唆を得たことがきっかけです。

こちらの連載においても、「社会で起きている事象を自分自身から切り離さない」ことの重要性について度々言及させていただいていますが、そのことを自分自身の胸にも改めて刻み込んでいる夏です。

寺田 弘志

8月のはじめに、ホームページの製作会社からカメラマンがやってきた。接骨院のみならず、いろんな治療所・エステサロンなどに撮影に行っているようだ。今回、製作会社に新しく作ってもらうホームページでは、次のような点に力を入れた。

たとえば、同じ肩こりでも、いろんな施術の仕方があることを知ってもらいたい。そこで、メニューごとに8種類ずつの施術方法の写真を載せることにした。左半身の施術は省略し、主に縮みすぎた筋肉を伸ばす施術に絞った。伸びすぎた筋肉を縮める施術は、ほんの一部にとどめた。それでも施術だけで100カットくらい撮ってもらった。

90分のタイムリミットを30分ぐらいオーバーしてしまった。カメラマンいわく「ずいぶんたくさんの施術の仕方があるんですね」

私「他の接骨院は、施術の仕方は多くないのですか？」

カ「こんなには多くないですね。たいてい、イメージみたいな施術風景を何枚か撮るだけです」

私「そうでしたか。たくさん撮影させて、しかも時間超過してすみません」

カ「いいえ、大丈夫ですよ」

後日、写真が上がってきて、メニューごとに写真を選んで説明文をつけるという作業をした。製作会社への連絡用に、旧ホームページにアルバムをアップした。せっかく作ったので、アルバムはそのまま残すことにした。

もしよろしければ、ご覧ください。

<https://teradasekkotuin2.jimdofree.com/>

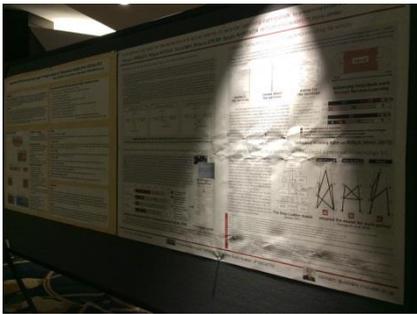
飯田奈美子

今年の夏は暑かった。この暑さは母と娘にはこたえました。保育園は大人で徒歩5分くらいのところにあります。しかし、暑さ

や保育園にいきたくない病のため娘が歩くことはなく、抱っこでの登下園をしていました。さすがに母も疲れ、常にイライラしていました。しかし、なんとかこの状況を改善しなければと考え、電動自転車購入しました。なんて楽なんでしょう！娘も自転車に乗れることがうれしく、喜んで保育園に行くようになりました。こんなことならばもっと早くに購入すればよかった。たかが自転車されど自転車。自転車ひとつで互いに機嫌よく朝を過ごせることができ、自転車に感謝です。

山口洋典

1年前に過ごしていたデンマークでも猛暑と聞き、それが摂氏20度を超えた日が続いていることを指しているのだと知ったとき、40度という数字を目にした日本との違いを改めて痛感しました。そんな酷暑



が続く日本の環境に戻って5ヶ月あまり、バタバタした暮らしが続いています。5月の自転車事故の怪我は落ち着いた7月には、現地1泊という強行日程で米国・ニューオーリンズでの「国際サービスラーニング・地域貢献学会」で発表してきました。ジャズの発祥地として知られるまちの文化的な側面を楽しむことなく、Jazzyなスケジュールを無事に送ることで喜びとしました。

(写真、あまりにピンスポットすぎる照明だったために後に場所が変更になったポスター発表の会場)

関谷 啓子

今年の春にやっと70歳を迎えて待望の「高齢者乗車証」を得た。今まで、外出の度にバス・地下鉄をいかに回数少なく利用して用事を終えるか・・・と頭を使っていたのでありがたいことこの上ない。

7月のある日、バス停には先客があった。夏というのに分厚い冬のコートを着ている高齢者だ。徘徊かなあ～と思いつつ一緒にバスに乗り込んだ。見ると足元が少しおぼつかない様子。こちらも気になるので見ないようにしながら視界の中においていた。

5つ目くらいで降りるらしい。最前列に腰掛けていた私は彼が降りるのをぼんやり見ていたのだが、降車の時におもむろに取り出したのは、ポロポロのK銀行の通帳であった。ええっ!!! 高齢者乗車証ではない。

運転手さんどうするかな？と一瞬気になったのだが、その対応が素晴らしかったのだ。若い彼は一瞬だけ固まったけれど、次の瞬間にはニッコリ笑って「気をつけて降りてください。ゆっくりとね。ありがとうございます」と声をかけ、本当に老人が降りきって歩道を歩きはじめるまで発車せずに待っていた。

見ていた私は彼の機転の効いた対応に感心すると同時に嬉しくなって、一日幸せな気分だった。

同じ日の夕刊には「市バスの運転手が障害をもった人への対応の悪さ」が記事になっていたので、特に印象深く覚えている。

家の近くにチェーン店のお手頃な理髪店が開店してからもう五年ほどになる。夏休みともなると子供のお客さんでよく繁盛していて活気があるのが見えて気持ちが良い。

私は、小さい頃は母が、大きくなってからはずっと理髪店で顔剃りをしてもらっている。その日も漫画を読みながら順番待ちをしていた。

人品卑しからぬ紳士の理髪が終わって会計することになったら、こう言った。「今持ち合わせがない。君、すまんが後でこの住所に取りにきてくれ」、「携帯電話で自宅に連絡してもらってきてもらえませんか?」、「いや、今誰も家にいないのだ。取りにきてくれれば払うから。」

上記のようなやりとりが暫く続いたが、店長が出てきて言う。

「分かりました。お客様が待っておられますので、取りに行けません、代金はま

た次回の時に一緒に構いませんから」と言う訳で一件落着?

残された店員は不満げだったが、「またと言ってもすぐに来られる訳じゃなし。いいから早く次のお客さんを・・・」と店長に促された次第。

認知症の高齢者か? 新手の寸借詐欺かはわからなかったが、私は認知症の方だと思いたい。こんな風に対応してくれる人達のいる街は暮らしやすいなあ～と思った。

高齢者が増えて、みんなそれなりに自由に動く街、動ける街が良い。緩やかに受け入れながら、それぞれができる範囲で負担していれば良いなあ～と思っている。

自分が少しずつ年齢が高くなると、今まで見えなかったことに気づき、知らなかった喜びを知る。悪いことばかりではない。

今、ホスピスにいる同い年の友人が「死を目前にした今だから見える景色があり、聞こえる音がある」と話してくれる。

友人の話は後ほど。

黒田 長宏

8月13日に記す。今日明日は祖母の新盆で、例年よりかなりの来客が見込まれ、大変かも知れない。既に午前中に4人も来客である。ほとんど母親が仕切ってくれていて、私だと自分の家でありながら居心地も悪い感じさえある状況。そういうのもあって、なんとか今の状態は変化させないといけなのだ。言葉を交わせたり、悪い事ばかりではないが、コミュニケーションを気軽に出来ないタイプは周囲の縁者にも複雑な感じを受けてしまったりする。母親はそういう点が大きなものである。日頃から付き合いをしてきている。そういう所が母親に似なかった。母親が倒れたら、どうなるのだろう。それもあって、パートナーが現れてくれないかとも思う。本文と重なることしか短信でも今回は書けなかった。記録的な異常な猛暑であるが、今後毎年なんてならないでいただきたい。

鶴野祐介

昨年末に某ミニシアターの会員登録をしたのがきっかけで、月1回のペースで世

世界各地が舞台の作品を観るようになりました。

チベット「草原の河」、フィンランド「希望のかなた」、スウェーデン「サーミの血」、ジョージア「花咲くころ」、宮城・岩手・福島「一陽来復」、イングランド「日の名残り」、高知「四万十 いのちの仕舞い」、韓国「タクシー運転手」・・・。

今日観たのは「ラジオ・コパニ」というシリアのドキュメンタリー映画で、命がけの撮影にまず驚嘆しました。スクリーン越しに火薬の匂いや腐臭さえも漂ってくるような、とても正視できない凄惨な場面もありますが、歌や踊りや未来への希望も描かれていました。シリアに平和を！と願わずにいられません。

臼井 正樹

現在、『対人援助と親密圏』ということでまとめた文章として整理することを試みている。この拙文でもよいし、あるいはこれから出るかもしれない本を読んでいただいて、多くの人たちから、介護福祉に関するプラスの価値をどのように言葉にするか、いうことに力をお貸しいただければ幸いである。

山下桂永子

7月末、今年も無事に町家合宿を終えることができました。今年は本当に開催が危ぶまれました。

そう、猛暑です。連日のインフルエンザにかかったような(今年の初めにかかったんですけど)気温。合宿の1週間前には町家のご主人から連絡があって、「今年はさすがに暑さがひどく、泊まることをおすすしめない、昨日からのお客さんは、暑さで夜寝れず、今日は他の宿泊施設にうつっていった。慣れている山下さんはともかく、初めてくるこどもさんは体調がねえ、、、」と言われていました。

他のスタッフとも話し合い、悩みに悩んでいたところに台風襲来。予測不能の動きを見せた台風のおかげなのか少し気温が下がり、ぎりぎり二日前に町家合宿開催を決めました。そして実際の台風による影響は、町家の看板が落ちたり、夜中の風の音に、参加者たちは眠れないなどは

あったものの、暑さによる影響などはほとんど(まあ例年通り 30 度はあったんですがもう感覚麻痺しちゃってました)なく、町家にエアコンがなくても1人1台の扇風機で十分快眠、行きたいところに行って見たいものは見ていつものように京都市内を縦横無尽に動き回りました。

前後どちらに1週間日程がずれていても、おそらく中止だったと思うので、奇跡的に無事に行えたことは、本当にホッとしました。

来年また開催の時期にヒヤヒヤしてしまおうのだと思いますが、無茶はしないで、冷静に頑張ります。いつも応援してくださっているみなさまありがとうございます。これからも応援(できれば陰ながらでなく、オープンに)よろしくお願いします。

尾上明代

前回、太極拳を始めたことを書いた気がするが、その時間に毎週の仕事が入り、もう行かれなくなってしまった。でも、身体を動かす時間は絶対に確保しようという算段し、結局、振付家の香瑠鼓さんのダンス・ワークショップに通い始めた。

ダンスそのものも好きだが、セリフや歌の即興などもあるので、私の仕事ともつながりがある。何より自分の身体を感じながらのびのびと呼吸ができるので嬉しい。

いろいろなメニューの中で特徴あるプログラムとして、「バリアフリー・ワークショップ」がある。障害がある人・ない人が一緒にダンスの表現空間を楽しむという主旨ですごく良いコンセプトだと思う。一つだけ残念なのは、(少なくとも私が参加したときは)いわゆる健常者は、(私以外では)アシスタントのダンサーたちと、障害をもつ参加者の親御さんたちだけだったことだ。私がほんとの「逆」バリアフリーになれたらいいな、と思う。

WSの最後に皆で歌いながら踊る「世界中が踊る日まで」というピースは幸せな気持ちになれて大好きだ。今後も自分自身のメンテナンスのために続けたいと思う！

小池英梨子

ノラ猫生活を続けるために個人事業で開業しました！

屋号は「猫から目線。」職種はアシスト業(そんな職種があるのかは不明だが申請に通ったのでいいのかな)。

後ろの方からサポートするよ、というより何かを達成するためのアシストパスをしっかり出したいという思いを込めてみました。

仕事内容は大きく分けて2つ。1つ目が「単発で猫の手も借りたい時」簡単に言えば猫に特化した便利屋です。

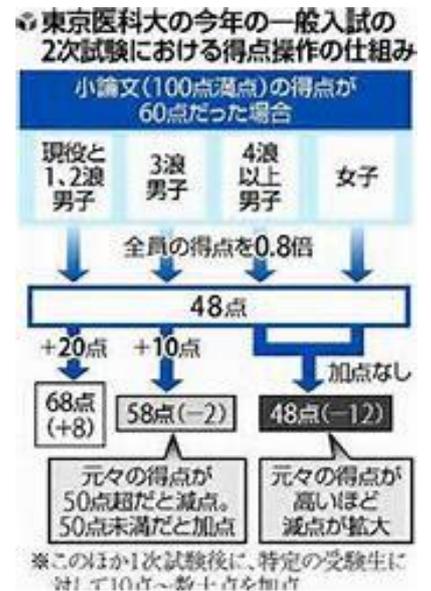
依頼を受ける条件は、遠回りにでも猫(または動物)にメリットがあると言えること。2つ目は「がっつり猫の手を借りるプラン」NPO や小さな動物病院などの運営サポートです。気になる方はご連絡ください(^^)/

松村奈奈子

今年のお盆のふたつのお食事会でのお話。

大学時代の後輩が国境なき医師団で大活躍。帰国するたびに我々夫婦とお疲れさまのお食事会をします。彼女から世界の国々の不思議なお土産をもらったり、現地のおもしろエピソードを聞くのがいつも楽しみです。

しかし、今回の夏季休暇で帰国した彼女が食事会で力説したのは「東京医大」の女子差別問題。「聞いてくださいよ！」「やっぱり私の受験でもあったと思う」「同級生百人に女子が十数人だけってずっとおかしいと思ってたんです」などなど。



そして、8月16日の我が家での恒例大文

字パーティでのこと。前の職場の後輩、産休明け女医さんが力説「受験で女子差別ってずっとあったし、今さらって感じですよね！」「でも、やっぱり子どもがいる今は当直できないし、迷惑かけているし…」などなど。

そして私も力説。20年以上前、予備校の受験指導で「医学部受験の理科の選択は、物理が有利。女子が多く選択する生物は大学側が点数調整をして女子の合格数を減らす」なんて言われて、苦手な物理をしつこく頑張りました。

もちろん、我々はみな「東京医大」卒ではないんですよ。これまで話題に上る事がなかったけど、やっぱりみんなずっと思ってたのか…

就職での女性差別はずっと言われてるけど、大学受験で女子差別ってね。みんなおかしいと思ってたけど、入試の最終合否判定はブラックボックスなんでどうしようもなかったし。でも「やっぱりおかしいよね！」って思ってたんだ…

「やっぱり」という言葉をいっぱい聞いたお盆休みでした。

奥野景子

学生時代を含めて実家を出てもう10年以上が経つ。大阪、静岡、三重、京都、東京と色々な土地で物件を借りてきたが、どこの土地でも物件がらみの不都合に遭遇したり、嫌な思い出が残っていたりする。

学生時代のオートロックがないアパートでは知らない男の人に玄関前までついてこられた。古い職員寮では大量のゴキウリがいた。綺麗なオートロック付きのマンションに住んだけど、隣人は週に数回大声で大喧嘩、上階の人は深夜までゲームとアイドルの曲を大音量で楽しんでいた。院生時代、隣人のベランダはゴミ袋であふれていた。引越し先では、早々にトイレのドアノブが外れ、玄関の鍵が閉まらなくなり、真夏にエアコンが壊れた。東京では退去時のトラブルから、引越し先で機能しない管理会社と大家さんに振り回された。

でも、初めての一人暮らしでは、友達とピザパーティーデビューを果たしたし、古い職員寮では建物内でクワガタ、蛍を見えるという貴重な経験もした(とても田舎だっ

た)。上階の人のおかげで、AKB48のデビュー曲をテレビで知る前に歌詞も含めて知っていたし、院生時代の家では友だちと修論をした。エアコンが壊れた時は、働く電気屋さんの姿から担当していた人のことを思い出し、シェアハウスでは今まで知らなかった世界を垣間見ることができた。

今の物件での生活は、まだ落ち着かない。ただ、これから良いこともあるのだろうと思っている。でも、毎回物件がらみの不都合や嫌な思い出に上書きされてしまう部分があるのも事実だ。別の箱に保存すれば良いのに上書き保存されてしまい、濃淡ができてしまうことが歯がゆい。だけど、それも仕方ないのか…と思ったり、思わなかったりもする。

柳 たかを

日航 123 便墜落事故は本当に事故なのか？

今、関心がある話題が一つある。33年前に起きた JAL123 便墜落事故だ。1985年8月12日のお盆 休み、夕闇近い東京羽田から乗員乗客524人を乗せ大阪伊丹空港を目指したボーイング747・ジャンボジェット機が離陸後20分過ぎに、相模湾上空で爆発音と同時に機体のコントロールを失い、そのあと約30分間不安定なフラフラ飛行を続け、最後に岐阜県と長野県の県境の御巣鷹山に墜落、墜落から16時間が経つてようやく4人の女性が奇跡的に救助された。この墜落事件のニュースは忘れられない。

1960年代のわが家の白黒テレビのブラウン管で大ヒット曲「上を向いて歩こう」をトレードマークのニコニコ顔で軽快に歌っていたアイドル歌手・坂本九(九ちゃん)も乗客の一人だったからだ。公式な事故原因は、このジャンボ機が過去に起こした尻もち事故で後部圧力隔壁に損傷を受けボーイング社が修理したが、一部修理ミスを残したまま運用を続けるうちに劣化が進み、ついに事故 当日に破壊が起こり、機内の与圧エアが尾翼内に一気に流れ込み、尾翼の2/3を吹き飛ばしてしまったことだという。同時に尾翼部に集中している油圧系統が全て破壊され、油圧で補助翼をコントロールすることも出来なく

なった。コックピットの機長・副操縦士・機関士の3人は、残された4つのエンジン推力のコントロールでフラフラ上下左右に蛇行しながら何とか羽田空港に戻ろうと格闘した。富士山を機体の右側に見ながら大きく右旋回し北上、山梨県内で一度360度回転した後、群馬県と長野県に挟まれる御巣鷹山方面に向かいそこで墜落している。

当時の写真週刊誌「フォーカス」で見た凄惨な墜落現場の写真、奇跡的に救出された川上慶子さん(当時12歳)が、自衛隊員に抱きかかえられホバリングするへりに引き上げられる写真は象徴的な映像だ。ところがその後、この墜落事故の本当の原因が意図的に隠ぺいされていたかのような記事を目にすることが多い。当時とちがい近年のインターネットの普及で遺体収容に直接関わった歯科医師に取材した記事や墜落直後に地元の若者たちがバイクで現場の山に駆けつけ、数時間後に墜落地点にたどり着いた時に見た話など真実と思える新たな情報を見聞きできるようになった。

事故は隔壁の修理ミスが原因で起きたとして解決済みで、インターネットでつぶやかれる数々の疑問や墜落原因の再調査など今さら問題にもならないらしい。これは、2017年2月から報道が過熱した「森友学園」「加計学園」問題も似た構図で、国会を巻き込んだ大騒ぎも責任の所在や真実はウヤムヤなまま、「国民はすぐ忘れるさ」と決めつけているかのような政権のごう慢さによく似ている。

JAL123便で同僚スチュワーデスをなくし、墜落原因を自分で独自に調べていくうちに、これは隔壁破壊が墜落の原因ではないとの確信に至った元日本航空客室乗務員でノンフィクション作家・青山透子さん。彼女が河出書房新社から今年出された「日航123便墜落の新事実」を近く手に入れ、さらに詳細を知りたいと思っている。

齋藤 清二

ここ3年半にわたって連載を続けてきた「あ！萌え」の構造ですが、個人的な事情で、今回は休載させていただくことに

なりました。楽しみにして下さった方がおられたら、深くお詫び申し上げます。



近況報告ですが、つい先日立命館大学大阪いばらきキャンパス(OIC)で行われた、日本パーソナリティ心理学会(通称パー心)の自主シンポジウム「オタクのパーソナリティキャラクターとの関連に注目して」に参加しました。この内容はもちろん本連載の関心事と直接的な関連をもっているのですが、何よりも最近、自分の関心事項しか情報が入ってこない狭い世界に閉じこもっていた感じなので、「オタク」「腐女子」「コスプレ」といったこの界限での最新の情報を知るよい機会となりました。シンポの会場では各自コスプレ衣装で発表しようということになり、私はもちろんそんなことはやったことがないので躊躇したのですが、周囲の先生方からの協力もあり、以下の写真のようなカオスな空間が会場に出現しました。

石田佳子

拙稿『海の向こうにでて見れば』は、今回で終了させていただきます。当初は異文化圏での生活が珍しく、驚きに溢れていたため、日本の社会や日本人を少し異なる角度から眺めることが出来るのではないかと期待を抱いて寄稿し始めました。しかし最近、マレーシアでの暮らしに馴染んで違和感なく過ごしているため、日本が遠のき、あまり鮮明に見えなくなって来ました。また、私の直感がくそろそろ「対人援助」という馴染み深い場所を離れて、別の課題にも挑戦してみたら?と囁いているように感じています。

この約3年間、私にとって3ヶ月に一度巡って来るこのマガジンの切は、惰性に流れがちな生活の中で自分を振り返り物事を考える貴重な機会になっていました。このような機会を与えて下さいました編集

局の皆様と、拙文をお読みくださいました方々に、心よりお礼を申し上げます。

しすてむ♪きよたけ

1つの分野だけでものごとを見ない、見られないのがぼくの特性です。そこで、今回違う動きを取り入れてみました。

大学院に入学した2012年から、東日本大震災復興支援プロジェクトに参画してきていたのですが、今年はプロジェクトとしてでなく、青森と岩手に個人的に行ってきました。8月末でした。

きっと、これまでプロジェクトで得たことは何であるのかを、自分で見つけ、具体的に実践に反映させたいと思ったのだと思います。

ぼくは、何か1つの土台があって、仕事をしているのではなく、むしろ、動きながら作っているのが必要だと思ったのでしよう。

答えは出ていませんが、もう少し動き続け、社会にいる自分の位置を見たいと思っています。

今回の本編では、僕の経験と頭の中。そして、そこから見えてくる社会を書いてみました。毎回、そんなつもりなんですけど、どうもうまく書けない。今回も、そんな感じに仕上がっています。ビジネスになるためにはどうしたらいいのか。そして、日常生活に起きた「老害」(嫌いなワードだから、触れてみました)について綴っています。

小林茂

今回の短信は、自戒のひとつにつきます！

6月、7月は、月の2/3ほど自宅に居ることができない生活でした。8月は、1/2強ほど自宅に居ることができず、自分でも、どうしてこんなに予定が入ってしまったのだろうと呆然としています。職務の立場上、引き受けなければならないものが多く、自分本位になれないことがありました。

そんななか、職場の健診もあり、右目の視力の低下(たぶん、前日、夜中に仕事から戻り、翌朝4時に起きて車で移動して帯広市の病院に健診に受けに行った影響もあると思います。)や、食道にポリ-

プが見つかったり、疲労の蓄積だけでは目に見える影響をつきつけられました。

周りの人は、「いつまでも若くはないから…」というけれど、いやはや身体と生活を労わらなければならない現実を知ると考えなければならないと思わされます。

(9月9日に公認心理師の第1回目の試験があります。なんか準備ができていないまま突入しそうです。厳しい〜。)

<温泉紹介>

☆馬追温泉

場所: 千069-1311 夕張郡長沼町字フシコ番外地

TEL0123-88-3737

明治中期の創業で、約1世紀にわたって親しまれている秘湯。無色透明のお湯は慢性関節リウマチなどに効果があり、飲用もできます。長沼市街地からバスで15分。馬追遊歩道沿いに四季折々の自然が楽しめます。内湯一つだけなので、長居は難しいかもしれません。



泉質: 単純硫黄冷鉱泉。源泉加温かけ流し。飲用可能。

内湯1か所のみ。うっすらと硫黄の香りがする無色透明のお湯。

営業時間、料金など: 年中無休。午前10時~午後9時。

日帰り入浴料金大人500円

水野スウ

2015年の夏とよく似た感覚を、この夏ふたたび味わっています。3年前に出した「わたしとあなたの・けんぼう BOOK」の続編を、安倍政権の政治を巡る動きと連動しながら、同時進行形で書いていたからです。

思い立ったのは、春は名のみはまだ雪深いころ。その時点では、9条に自衛隊明

記の案と国民投票について、簡単に説明したミニパンフをつくるつもりでした。でもその後、モリカケ疑惑・自衛隊日報隠し・財務官僚セクハラ・厚労省ずさんデータなどなど、現政権から活火山のごとく問題噴出。これじゃさすがに改憲まっしぐら、ってわけにいかない、という状況が生まれて、その分、私には考える時間が与えられたな、と思いました。

それから半年余り、くんずねんず(四苦八苦、の金沢弁)しながら原稿を書いてきて、今やっと大詰めの作業中です。「けんぼう BOOK」を出したあと、憲法のおはなし出前に行った先々で、「憲法って、9条だけじゃなかったんですねえ、、、」というたかさんの声を聴いたことは、今回の本づくりの大きな支えでした。

それと同時に、これまであいまいな距離をとってきた9条とも、私なりに真剣に向きあいました。憲法に自衛隊を書き込む、ということにどんな意味があるのか、どんな変化が起きてくるのか、多くの人に自分ごととして考えてほしくて、そんな問題提起もしている本です。憲法という固そうなジャンルの本でありながら、憲法でつむぐ物語のようにも読める、ちょっと不思議な本になりそうですよ。

中島弘美

『カウンセリングのお作法第16回』は「リフレクティングチーム」について取り上げました。これは、対人援助学会第11回研究会において参加者の皆さんに体験していただいたものです。

ほぼ初対面の人が5名ずつのグループを作り、クライアント役とカウンセラー役を順番にする多人数でのカウンセリングをしました。そのエクササイズ資料を載せています。

今から18年前の2000年夏に、シカゴとヒューストンを訪れました。そこで、ソリューションフォーカストアプローチや、コラボレイティブアプローチの実践に触れる貴重な機会がありました。私にもリフレクティングチームに入ってほしい、とにかく、さまざまな意見がクライアントにとって必要だということです。もっと英語を勉強しておくべきだったと反省をしたことはいうまでもあり

ませんが、その経験をもとに、このエクササイズの手順を作りました。

現在、社会福祉の現任研修にも取り入れ、この方法を体験してもらっています。最近、企業でもこの方法が注目されていることを知りました。これらの考え方が、援助現場で働く人たちに少しでも役立てばうれしいです。以上

藤信子

7月の終わりから8月初旬、スウェーデンのマルメに行った。5日間の学会が終わり、翌日はゆっくりしようと隣の町のルンドに出かけた。スウェーデンで2番目に古い大聖堂があり、古くからの大学があり、中世の街並みが残った緑の多いきれいな街だった。

野外博物館(広い敷地にいろんな時代のいろんな建物～農家とか司教館とか裕福な人の屋敷とか～がある)は広いので全部は回り切れなかったが、馬小屋を民芸品の資料館にした建物の一部に(私にしたら)突然に不思議の国のアリスに出てくるキャラクターがあったり、ぬいぐるみのようなものがあり、子どもが遊んでいた。

しばらく庭を歩いていると、男の子がお母さんを相手に木の剣で、チャンバラして遊んでいた。その剣はそばのケースにくっつか入っているようだった。博物館に馴染むように備えてあるのかなと、分からないなりに考えた。

そういえば、朝食会場に行く途中のスペースに、子どものテントや遊ぶスペースがあった。ホテルの中の子どものためのスペースは、日本ではあまり見かけないと思う。いろんな場所で子供が大人と一緒にいることが出来て楽しめるようにしているのかなとか、福祉国家というのはいよいよゆったりしているのかなとか、根拠なく考えた。日本で少子化を心配している人は、そういうところを見て欲しいと思った。

千葉晃央

実家倉庫にずっとあった8ミリフィルム。映写機がないから見るができなくなって約40年?フィルムはずっと保管されていた。調べると、富士フィルムに送るとDVDにして、返ってくるらしい。早速、利用し

てみた。送ったのは7本。昭和47(1972)年の秋田でのお宮参り。年不詳4月7日撮影の東京多摩湖、井の頭公園。昭和49(1974)年4月27、28、29日撮影 神奈川県伊豆箱根。昭和51(1976)年撮影七五三。昭和52(1977)年10月23日宮城県広瀬川いも煮会。昭和49(1974)年4月撮影、東京石神井公園お花見。撮影日不詳 箱根彫刻の森。以上7本立てである。画像をクリアに処理もした上での仕上げるとき、期待は高まった。ネットで申し込み、段ボールが届き、そこに入れて出荷。ちょうど1週間で仕上がってきた。代引きで料金支払いだった。

どきどきしながらDVDを再生した。亡くなった祖父、祖母たち、そして母も、父もとにかく若い!生き生きしている!みなぎっている!晩年、20年半身麻痺で過ごした祖父もしっかりと歩いている!当時の街並み、富士山、高い建物がない自然豊かな伊豆の景色!素晴らしい。実家の以前の姿、更にその前の姿もあり、当時の町内の景色も確かに見覚えがある



自分の赤ちゃんから幼稚園までの姿も新鮮。当時来ていた服のデザイン、その肌触りもなんとなく思い出したりするから不思議。音がないのもよくて、何度も観てしまった。一族は代々受け継がれていることも実感。実家に送ろう。速達で!と思い、さっき京都駅の郵便局に行ってきたところの23時。

中村正

私の社会病理学の先生である佐々木嬉代三先生が亡くなった。立命館大学の副総長を務めた後、2005年に退職され、その後、名誉教授となり特任教授を5年務めて70歳を迎えて完全に退職された。

先生が副総長の時に対人援助学会に関係の深い立命館大学大学院応用人間科学研究科が開設されている。その後は研究会などを続けられ、大学にも来られ、学会にもよく参加されていた。もうすぐ 79 歳の誕生日を迎える直前の 8 月 30 日のことである。

大学院生の頃からお世話になったのだから 35 年程の時が経つ。対人援助学会の発起人にもなってもらった。その時先生は日本社会病理学会の会長をされていたからでもある。今年の 5 月中頃に脳梗塞を患いリハビリに取りかかろうということだったがその前からの肺気腫が憎悪し、帰らぬ人となった。

この夏、8 月 24 日にお見舞いした時の握手の感触と交わした言葉が最後となった。その時はすでに起き上がることもできずにベッドの傍らで話ができた程度だった。それでも社会病理学を愛しておられた先生は、「おい中村、今年の学会はどこだ？」というので、「関学で 9 月 29 日からですよ。」と答えたら、「そうか、近いところやな。じゃあ今年も行くわ！」いつもの調子で言われた。先生には今年の学会誌の巻頭言をお願いしていた。脳梗塞で入院された後にこの原稿が未完であることを気にしていたので、口述筆記をしようと考えていた。その約束が果たせないままとなった。原稿の概要はほぼ完成していたが言語の回復が十分でなくリハビリを待って行おうと考えていた。先生が最後に何を書こうとしていたのか、家族に許可をもらって準備中のものだった書きかけの原稿をいただき完成させたいと思う。先生の研究意欲の旺盛さは衰えていなかった。社会病理学が本当に好きで、生涯かけて追求して来られた先生の遺志を継いでいく責任を感じた次第である。

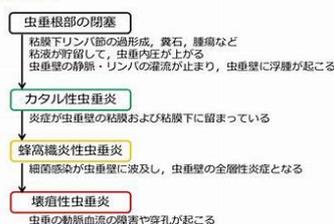
袴田 洋子

この夏、人生、初めての全身麻酔と緊急手術を受けました。急性虫垂炎で。いわゆる「盲腸」ってやつです。

8 月 15 日(水)の朝、みぞおちが痛くて目が覚めて。胃薬飲んで、全く改善せず、「これは、ちょっとやばい」と思いました。救急車呼ぼうか、悩みましたが、救急車

呼ぶと、受診歴が無い場合、どこの病院に搬送されるかわからないので、仕方なく、夫の運転で最寄りの総合病院に行きまして。一般外来だから、診察まで、順番を待つわ待つわ待つわ、レントゲン待つわ待つわ待つわ、造影 CT 検査待つわ待つわ待つわ。

炎症の進行



途中、トイレで嘔吐したり、ペンチで喰りながら、初診受付してから、6時間後の 16 時 30 分、ようやく「急性虫垂炎疑い」で、外来からそのままオペ室へ。

オペ前、お医者さんも看護師さんも「オペすれば、楽になるから」と言ってくれて、その言葉を信じて、全身麻酔で痛みから解放、、、されるはずが。腹、切った後も、痛みはあるよ、と誰も教えてくれず。オペ後の ICU での一晩は、ハラは痛いし、コシは痛いし、管だらけで引っかかるし、眠って意識を落としたいのに、あちこち痛くて眠れない。私は、重症の腹膜炎でもう死ぬんだ、とっていました。

オペ後の患者さんは、こんなに辛くて苦しい思いをしていることを初めて理解しました。ごめんなさい。それと。「盲腸(急性虫垂炎)」って、すごい痛いです。あんなに痛いの、なんで、あそこまで軽んじられるのか、納得いきませんが、そりゃ、治るからですよ。自分は、今回、蜂窩織炎性虫垂炎ってことで、軽度・中度・重度の虫垂炎の中の、「中」でした。腹腔鏡手術ゆえ、術後は短期間で済み、19 日(日)に退院しました。23 日(木)には、良・普通便も出て、完全復活しました。

団遊

兼業、副業、複業、ダブルワーク。呼び方は様々ですが、最近それらを解禁する会社が増えました。ぼくが 10 年ほど前に同様の方針を打ち出し、実践し始めた頃は、ほとんどの人が懐疑的でした。

会社は営利を追求する集団としてだけでは、機能しなくなってきています。作れば売れた時代においては、営利の追求が社員の暮らしの豊かさに直結していました。年功賃金が担保され、我慢はいつか報われる仕組みでした。しかしこれからは、そのようなことは期待できません。

一方で時代がどう変わっても、社員が暮らしの豊かさを望むことは変わりません。とすれば、ピボットすべきは「営利の追求」の方であり、これを「社員の成長支援」に書き換える必要に迫られていると感じます。さもなければ、優秀な社員から会社を去り、会社が持続するための血肉である営利すら担保できなくなってしまうでしょう。

ところが、見渡していると「社員の成長支援」がままなりません。「社員の成長」とは何かを定義できている会社も多くないようです。相変わらず売り上げマシンに仕立て上げることを「成長支援」だと考えている会社もあるようです。このような時代錯誤なマネジメントがまかり通るのは、現在のマネジメント層の多くが昭和的根性論で育てられてきたためです。それではいけないことは分かる。でも、どう振る舞えばいいのかわかるとは思えない。気付いたら「今時の若者論」を同僚としてしまっている。そんな風になりたいとは思っていません。

ぼくの目にはそんな風に見える現況において、次号から、人材マネジメントをテーマにした新連載を始めることにしました。「新卒の就職活動」にフォーカスして連載を続けてきた「街場の就活論」は終了します。10 年以内には完全に崩壊するであろう新卒一括採用も含めて、もう少し大きな視点でぼくなり経験と積み重ねてきた「人材マネジメントの肝要」を書いていこうと思います。

大石仁美

母の死に寄せて思うこと

母が 92 歳で亡くなり、四十九日も終えました。ああ、一つの時代が終わったなあというのが実感で、淋しいとか、悲しいというよりなんだかほっとしたのが正直なところでした。

母は、5 番目に生まれた初めての女の

子で、(4番目に生まれた待望の女の子が、生後まもなく死んでしまったため)父親にそれはそれは可愛がられて育ったそうです。お茶、お花、和裁、洋裁、編み物など一通りなんでもこなす人だったので、家族は皆その恩恵を受けましたが、プライバシーという概念は彼女の脳内にはなかったもので、自分の思う通りに事が運ばないと、つかつかと人の心に踏み入って、土足で壊してしまったとしても、悪いなどという感情が湧くことはなく、自分があげていることが分からないあなた方が悪いのだと結論付けて、謝るということはありませんでした。

当然夫婦仲は悪く、母の感情を爆発させた暴言とそれによる父のすねた行動を身近に見ながら、「まったく反対のことをしているなあ。なんで母は気づかないんだろう。そうすれば、

父は素直に母に感謝するのになあ、と悲しく二人を見つめていた子ども時代を思い出します。

母は京都、奈良にきて博物館等を巡るのが好きでした。ある時、熱心に古文書を眺めている母に感心して、「こんな難しいことよくわかるのね」と言いましたら「わからん！」と母。えっ？と一瞬その答えにびっくりしていると「幼いころより父親に連れられてよく来たのよ。」と懐かしそうに眺めているのです。

その時私は理解したのです。母がファザコンだったのだと。父とうまくいかない理由がそこにあったのだと。

母の父つまり私の祖父は、仏師で、豪快な人でした。人の面倒見がよく、情の熱い人だったので、いつも家にはひとの出入りが絶えませんでした。母はそんな父親から、誰よりもかわいがられている自分を自覚し誇りに思っていたようです。男性の基準を自分の父親におき、父親のように尊敬できる人、父親のように、自分を愛してくれる人を伴侶に求めていたのです。

その意味で夫である私の父は、物足りない人でした。彼女の求めるものと現実との落差に怒りをぶつけていたのだとやっと理解出来ました。

可哀そうなのは私の父でした。我儘で言いたい放題の妻を、まるごと包み込ん

で愛せるほど度量の大きい人ではありませんでした。家に帰るとストレスで激しいぜんそく発作をおこし、入退院を繰り返す父でした。晩年になって、家ではいっさい食事をとらず、旧知の女性宅で食事を作ってもらい、就寝のためだけに帰宅するという生活をしていると本人から聞きました。家で食事をしないのは母への抵抗で、もはや意地です。

「80歳を過ぎると、毎日車を運転して食事に通うのはやっぱりしんどい。」

「家で食べようよ。頼んであげるから」と言った時の父の悲しそうな顔を見たとき「いいじゃない、しんどいのなら無理に帰ってこなくても。その家に居たら。のこのこの人生、好きなように生きて罰あたらないよ。」私のこの言葉に驚きの表情をした父でしたが、本当にこの日から家に帰ってこなくなりました。母の激怒は凄まじく、外に女がいたなんて！どこのどんな女だ、と詮索しては父を罵倒し毎日のように怒りを私にぶつけてきましたが、私は知らないふりを通しました。父は7年前に88歳で、その人の家で亡くなりましたが、このころから、母の毒舌は影をひそめ、認知症が急速に進み始めました。夫が亡くなった後、老後は好きなことをして人生を楽しむという女性が多いようですが、存命中も亡くなってからも、人生を楽しむという選択肢を彼女は選び損ねたようでした。

人と人を繋ぐのは、思いやりの心です。思いやりのある優しい言葉が心を動かすのです。

言葉は命を吹き込むことも奪うことも出来る。言葉は生き物。そのことになぜ気づかなかったのか。

自分が誰かもわからず、息子や娘の顔もわからず、グループホームの職員に看取られて亡くなった母ですが、生き方を変えるターニングポイントはいくつもあったのになあと、あとからしみじみ思う私です。

村本邦子

今年からドクターの院生たちを受け持つことになったので、私も真面目に研究をしようと思いき、この夏はじっくり勉強することにしました。学生に戻った気分が基本的な

研究法の文献を読みながら、7年間もためこんでしまった大量のデータからいくつかの切り口でピックアップし、整理する作業をしていた。

まだ途中であるが、これらをまとめて、これから少しずつ発信していきたいと思っている。「被災と復興の証人になる」とプロジェクトを立ち上げ、伝えるべきたくさんのご意見を頂いてきたのに、動き回るばかりで、きちんと表現することができていない怠慢を反省している。

時々、どう考えるべきか頭を抱え込んでしまうこともあるのだけど、基本的にわくわくして、とても楽しい作業だ。しかしかんせん、この後のスケジュールもすでに満杯状態……。

國友万裕

イオンシネマ桂川には滅多に行きません。僕の住んでいるところからは行きづらいので他の映画館を利用しています。ところが、8月の中旬、例の超話題作『カメラを止めるな』がここでしかやっていなくて、行くことになったのです。ネットでチケットを予約していて驚いたのは、イオンシネマは55歳からシニア割引が適用というのです！ということは、あと半年で俺はシニア扱い！！1100円しか払わなくて良いということになります。嬉しいような、悲しいような、複雑な気分でした。



50を過ぎると残された時間をしみじみ考えるようになります。50代で死ぬ人はそうそういないけど、60代で亡くなる人はたくさんいる。うちの父も65だったし、埼玉の義理の叔父は68でした。その一方で90過ぎて元気に生きている義理の叔父もい

るので、まだ余生がどれくらい残されているのかはわかりません。だけど、死ぬ確率は年をとるに連れて、少しずつ高まって行くことは確かなのでしょ。

年をとると時間の経つのも加速度的に速くなっていきます。あと10年、20年なんてあつという間に過ぎるでしょうね。大事に時間を過ごさなくてはなりません。ところが、この頃、ワクワクすることというのがないのです。楽しいことがあっても昔ほどワクワクしなくなって来ています。これは年のせいなのでしょう。もう一度ワクワクしたいなあー

これからは若い友人をたくさん作ろうと思っています。スポーツもやってみたい。ファッションもちょっとマッチョに笑。

年を取っても、できる限り、学生がたくさん下宿している界隈で暮らして、若い気分のまま一生を終えたいです。ナイーブな、万年お坊ちゃんのおじいさんになりたい。それがとりあえず、これからの夢です。

北村真也

認定フリースクール 学びの森 代表
<http://manabinomori.co.jp>

2000年より、京都府亀岡市で学習者の変容をめざした能動的な学び場「学びの森」を運営しています。不登校の生徒たちが学ぶ「フリースクール」と「ハイスクール」、ひきこもり経験のある若者たちが学ぶ「ユーススクール」、発達障害を持つ生徒たちが学ぶ「放課後等デイサービス」、学校に通う生徒たちが学ぶ「探究スクール」の5つのスクールを展開中。今年度から京都府教職員研修を担当。亀岡市教育委員。

古川秀明

歌声喫茶が見直されています。高齢者人口が増えているのもありますが、みんな歌う楽しさが求められているのかもしれない。今の高齢者の方が歌声喫茶で歌う歌が、私の好きな歌と一致してきています。フォークソング、ニューミュージック、グループサウンズなんか主流となり、昔の主流だった童謡、唱歌、軍歌が少なくなっています。

でもよく考えたら、昔の歌声喫茶で歌わ

れていたのは当時の流行歌だったのだから、歌声喫茶のあり方も変わって当たり前かもしれません。



西川友理

京都西山短期大学で保育士養成をしています。

2年前の秋に初めて浦河べての家の「当事者研究」を実際に体験し、大きなショックを受けました。「これ私もやりたい！ていうか、私に要るわ、これ！」と考えてから、様々に一緒に考えてくださる方の力をお借りして、今年の1月から「支援者の当事者研究会 at Osaka」という会を2カ月に一度のペースで実施しています。この会に対しては、協力者も賛同者も反対者もいて、あらゆる人の思いが今の場を作っていると思います。

この場のあり方を、試行錯誤しつつけています。失敗も成功もわかりミスも神様の配慮もあり、努力と話し合いと冗談と放り投げで対応しています。なかなかこれでよしと落ち着く間がありません。

ただ一つ、この会の準備と運営をしてきたことで、大きな変化を感じています。それは、参加者にとって安全と安心さえ確保できていれば、「何とかしなきゃ！」と思いつ過ぎない方がいい、ということです。もちろん「こうしたい」という思いはありますが、軸はそこにあると認識しつつも、緩やかにあるという中庸に耐える感じ。なんというか心のインナーマッスルをおだやかに鍛えられている感じです。

10月には名古屋で、当事者研究全国交流集会有ります。当日の分科会には「支援者の当事者研究」とか「子どもと当事者研究(教育者・福祉の現場で)」、さらには「家族のかたち」などという文字が…。うーん、どれに参加するか、めっちゃ迷う！

中村周平

今回、原稿を挙げる事が出来ませんでした。申し訳ありません。

近況報告としましては、熱中症に二度も見舞われるアクシデントがありました。今夏の暑さは。本当に異常なものだと身を持って体感した次第です。

また、これは嬉しい報告ですが、街中で応用人間科学研究科の院生の方から声を掛けて頂くことができました。なんと、ノースサイドを読んでくださったとのこと。

自分の伝えたいことが、誰かに伝わっていることを実感できるのは本当に嬉しいことです。院生さん、本当にありがとうございました。

坂口伊都

19歳の息子が一人暮らしを始めました。通学するのにドアツードアで1時間半ぐらしかかっていたので、通えない距離でもなかったのですが、どれぐらいの家賃なのかを先に父母で不動産会社に行って確認し、これなら何とかなりそうとなりました。息子に3件内見してもらい、息子自身が決めました。親の一押し物件とは違いましたが、なかなかいい物件を選んだと思います。

息子を見ていると体験して学び、吸収していく子なのだと感じています。初めてのバイトも一所懸命していますが、これといった目的もなく、地震で電車が全て運休している時も片道1時間かけて自転車で通っていました。妹に「お兄ちゃん馬鹿なの？」と言われていたのですが、まあ働き続けることは力なので、自分のお金で生活することを体験してもらいましょう。本人も一人暮らしをしたいと思っていた時期で、背中を押す形になりました。動物でも人でも、本能的に巣立ちの時というものがあるのかなと感じました。

息子は、引越の前日になってもなかなか荷造りしなかったり、引っ越したら冷蔵庫に自動製氷機がないと驚いたり、味噌汁を作ろうと意気込んだら味噌を買い忘れたりして、いろいろなため息が出ます。100円ショップに行って、玄関マットや棒のおしゃれな芳香剤を買ったりして、意外な

一面を見せています。この先、いろいろ失敗もあるでしょうけど、面白い人生を歩んでくれそうな予感がして、楽しみです(笑)

河岸由里子(臨床心理士)

【あ～受験生】

もうすぐ高齢者の仲間入りかと思う歳になって、受験生になるとは思ってもいなかった。脳は確実に老化していて、さっき覚えたこともすぐに忘れるし、今やろうとしたことも「何しようとしたんだっけ？」と分からなくなったりするような状況なのに、新しい知識、法律等を覚えるのは至難の業。仕事を断るなど考えられないし、次々と仕事が入る中で、勉強する時間を取るのも難しい。友人はスマホに入力したものを読み上げてくれるアプリを利用して、運転中も学んでいるという。色々な人が、「このテキストが良い」とか「あの問題集が親切だ」とか言っている。誰が作ったのか予想問題のプリントが回ってきたりもする。みんながみんな勉強していると、置いて行かれている気になって少し焦り、その次には、「まあ落ちてもいいか」と諦めの気持ちになる。10万人も受けるという公認心理師試験。臨床心理士資格は一体何だったのか？現任者講習を受け、沢山の出費もして…。あ～あ。やってらんない！！

岡崎正明

父が昨年頃から病をえた。すぐに死に至るような病気ではないが、難病である。ときどき目が見えにくくなったり、物が飲み込みにくかったりする。疲れやすくなったりもしたようだ。古希を過ぎたくらいだから、無理がきかなくなってくるのはある程度当然なのだろうが、本人は相変わらず忙しく働きたいらしく、困ることも多いようだ。遠くまで車を運転したりするため、心配して母も私たち子どもも注意するが、当然のことながら素直に聞く訳がない。

先日お盆休みでのんびりしていたら、「運転手をしてくれ」というので、たまの親孝行半分と、地域の交通安全への貢献半分で引き受けた。近くには住んでいるが父子二人で行動することなど滅多にないことだ。隣で道案内をする父は、いつも通り堂々とエラそうで、人にもものを頼む態度

ではない。亡くなった伯父の善行(2割)や悪行(8割)を笑いながら語り、相手との約束の時間に遅れても「30分は大丈夫なんじゃ」と反省のそぶりはなく、予定通り事が運ぶと「ほれみい。わしの言う通りじゃろ」と喜んでいる。私は半分あきれつつ、半分は「これのどの部分を引き継いでしまったんだろう…」と落ち込み気味に心当たりを考えていた。当人は知る由もないだろうが。

途中、父が母との電話で「今日は運転してもらって、ほんまに助かつてるんじゃあ」と自慢げに話すのを聞き、それでもこの人に褒められると嬉しくなってしまうのだなあと、しみじみ感じてしまった。

見野 大介

夏のイベントラッシュも終わり、注文と秋のイベントに向けて制作をとった矢先に、ギックリ腰やっしまいました。結果的に、これが欲しいと思っていた長期休暇となりました。ストレッチなど体のメンテナンスの必要性を痛感する夏となりまして、ストレッチとマッサージクッションで腰をケアする日々です。いつまでも若い気分でしたら駄目ですね(笑)

浦田雅夫

いろんなことがあった夏。地震、大雨、台風。つくづく、吊り橋の上のような国であることを再確認。被害に遭われた方々へお見舞い申し上げます。

2歳の子はよく無事で。「おじちゃん、ぼく、ここ」存在証明。テレパシーで、おじちゃん到着。逃亡犯の居所もおじちゃんなら探せそう。いつも変わらないのは、我がが生活習慣。夏休みの宿題、ああ最終日。頸椎痛久々に入ったMRI。狭い。成長を止めないと。

団士郎

定年退職して半年足らず。ほとんど前と変わらない慌ただしい日々を過ごしている気がする。でもあちこちに、隙間が出来ている感覚はある。一息つけるのである。

金、土、日と遠征して戻ってきた月曜日は予定が入っていなかったりするので、留守中に届いた郵便物やメールの対応、宅

配の処理などをする。締切りの近づいてきている原稿の対応もする。

以前は、この月曜日が午後授業で、夕刻からクラスター(院のゼミ)だった。そして翌火曜日は家族療法の授業だった。ここがフリーになったのはゆとりだ。

その結果、道楽の読書がはかどる。いや、Amazonの中古書注文がはかどるといった方が適切かもしれん。コンスタントにバンド・デシネ(フランスのグラフィックノベル)にも手が出るようになった。コミックスなんだけど、なかなか読めないのだが。

*

本マガジンでは話題の鴻上尚史著「不死身の特攻兵」(講談社現代新書)を読んで、これを舞台人の氏に書かせたのは使命感だろうと思った。そして今、私が果たすべき使命は何かなどと考えた。

使命の一つはおそらく、自分が知ることになった現代社会の非公式な情報資源・資産を、出来るだけ正しく記録して伝えることだ。これと真逆の行為が、記録の歪曲、改竄、焼却だ。

そんな出来事が今、世に現れ、話題になっているのには歴史的必然がきつとある。受け止めるべきメッセージは、口先評論、揶揄の仲間入りではなく、あなたの果たす使命は何ですか？という問いだ。

先人の智や資産、己に授けられた天分を、自分が世界を要領よく泳ぐ道具としてしかみられない者は、悪しき欲望の洗脳から逃れられないまま、時代に溺れることになる。

さんざん私達を洗脳してきた「時代」に対して、革新的行動のヒントは頭の中にくさん存在するはずだ。

それを一つでも果たすことが、今を生き、次世代のためにわずかながらも貢献する事ではないかと思う。

大谷多加志

来月の(発行日からすると今月)公認心理師試験を受験するため、いったい何年振りかという、試験勉強に取り組んでいる。「久しぶりに基礎から学びなおして新鮮だった！」とか「学生の立場に改めて立つことができた！」とか、無理矢理ポジティブにこじつけてみようとしても、やっぱり「何

やってるんだらう”感はぬぐえない。まだ何の実体もないものについて、心から“欲しい”と思う動機があるわけではなく、「今しか取れない(移行期間がある)」「ないと不利になる(かも)」という薄っすらとした不安に動かされている実感と、だからといって「関係ない」と無視することもできない自分に、どこかうんざりしているのだと思う。

そんな折に、鴻上尚史氏のネット記事が目に入った。マガジンの書簡型連載でも触れられていた「不死身の特攻兵」の著者である。鴻上氏が語る「同調圧力の強さ」と「自尊意識の低さ」という日本人の特徴と、国家資格を巡る狂騒は、無関係ではないと思う。鴻上氏の言う、「フィールドを変える」「小さく戦う」という立ち向かい方は、スッと胸に落ちた。自分にできるやり方で「小さく戦う」ことを続けようと思う。

馬渡徳子



今春より、金沢大学大学院に、社会人枠入試で進学した。現役で、仕事とプライベートの調整をしながらの通学は、なかなか大変だが、様々な国からの留学生も多く、絶好のリフレッシュにもなっている。

まず、最初から英語に泣かされている。全編英語の授業に、まったく理解できずにこれは英語を習いに行かなければならないかと困っていたら、担当指導教官に、「あなたは、ソーシャルワーカーでしょ。英語塾に行く前に、その仕事の特性を活かして、やれることがあるでしょう。」と助言頂き、「おお!! そうだ。留学生と友だちになって、助けてもらえばいい。それに、英語が堪能な水野スウさんという友人もいる。娘婿も英語が得意だ。リウマチ患者会の役員にも、英語の先生がいた。」と、自

身の自助・互助の力に改めて気付くことができた。

そんな「仲間の力」で、何とか前期二度の英語での発表を乗り越えることができている。本当に、「ありがとう」。これからも、よろしくです！

竹中尚文

今年の夏も暑い。私が暮らす田舎で、周囲の農家が野菜を買っていた。七月初旬の大雨に続いてのカンカン照りで、野菜が枯れてしまった。そんな状況の中で、近所の人から「水不足と暑さで硬くなってしまったオクラだけど、食べるか？」と好物をいただいた。

今回は、インド風オクラの炒め物だ。とっても簡単なサイドメニュー。

【作り方】①オクラを 1~1.5 センチ程の輪切りにする。輪切りというのかなあ。硬いオクラだったら、電子レンジで加熱しておく。②フライパンにバターを入れて熱する。本当はギーを使うのだけでも、入手困難なのでバター。バターの量は多め。目安は、オクラが足湯をするような量。③バターを十分に熱したら、クミン(粒)をいれる。クミンシードだから熱でパチパチという、風味が出てくる。④オクラをフライパンに入れて、塩を振る。⑤クミンパウダーとカルダモン(イライチ)パウダーとホワイトペッパーを加えて、さらに熱する。レッドペッパー(一味唐辛子)もお好みの量で。⑥ガラムマサラを加えて味を調べて、できあがり。※ここに書いた香辛料だと普通のスーパーマーケットの調味料の棚で売っている。

【音楽】調理場で流すのは、シヴクマール・シャルマとザキール・フセインのセッション。共にインド音楽の奏者。シヴクマール・シャルマはサントウールという楽器の奏者。サントウールはペルシャから中央アジア及びインドの楽器で、箱に貼った何本もの金属弦を杓子のようなもので叩く。インドでサントウールといえばシヴクマール・シャルマといわれる。タブラはインドの代表的なパーカッション。ドラムの表面を手ひらで押すことで、音の高さを変えて演奏する。ザキール・フセインはその父アララカと共にインドを代表するタブラ奏者。ここでおすすめするのは“Shivkumar Sharma

Rag Madhuvanti & Rag Misra Tilang”
1987/1988

【告知】前回にお知らせした『七日参りのお話 —大切な人を送った人へ—』自照社出版 ¥1,000+税が Amazon で買えない。紀伊國屋ウェブストアで購入できる。買って下さい。

荒木晃子

島根県のクリニックに、毎月の出張業務がスタートして、はや 12 年が過ぎようとしている。定期以外の松江訪問を入れると、通算 150 回は大阪—松江間を往復していることになるだろう。

過去に、父、母、愛犬を亡くした折も、休むことなく業務を継続してきた私に、今年初めて、出張業務をキャンセルせざるを得ない出来事が起きた。6 月後半の大阪北部地震である。23 年前の阪神淡路大震災を耐え抜いた自宅マンションに、今回は大きな被害もなく大事には至らなかったが、室内は相当なありさまだった。

しかし、それ以上にダメージを受けたのは自身のメンタル。そして、メンタルの不調に伴う体調不良だ。災害の大きさと人が受けるダメージが必ずしも比例するとは限らないことを体感した。



ひと月に一度のカウンセリングを長年継続するクライアントさんや、やっとの思いで予約を取っていただいたカップルに申し訳ない思いを抱きつつ、7 月の業務を終えた翌 8 月。今度は、台風の上陸で、出発日の航空便が直前に欠航となった。慌てて、何とか島根へいけないものかとネット検索し、新幹線も止まった陸路に一本だけ高速バスが運行可能とあり、化粧もせず慌てて飛び乗り何とか業務日程をクリア。そして翌週、今度は、佐賀県へ向かう

航空便が福岡空港のトラブルのため、上空で約30分の旋回の後着陸。福岡から佐賀行き的高速バスの乗車時間に間に合わず、面接予定時間ぎりぎりに現地到着となる始末。

続けて来週は、北海道旭川市で生殖医学会の口頭報告があり、その準備に追われる日々を過ごしている。TVでは、出発予定日に大型台風が関東を直撃するとの予報が流れている。果たして、当日の伊丹空港から羽田経由、旭川空港までの移動には、何が起きるのだろうか。

島根(クリニック業務)、佐賀(突然、難病を発症した児と家族の合同面接業務)、旭川(日本生殖医学会にて共同研究の報告)、東京(日本家族心理学会にてシンポジウムを企画)、島根(クリニック業務)と5週連続の出張に、不足の事態に対応する力量を身につける必要があることを実感する今日この頃である。

木村晃子

1回休み

対人援助学マガジンは、創刊号から書かせてもらっています。回を重ねるごとに、締め切りが守れなくなり、書く内容も迷走。

書くことは面白い。テーマの取り上げ方や書き方は、後になって読み返してみると自分の心情の波が見えてきます。マガジンは、私の人生記録になっているようです。

もともと、私は、きちんとしている方だったはずなのに、いつもの間にか、締め切り遅れの常習になってしまいました。そして、今回は、遂に原稿を書くことができなくなりました。

竹中さんとしている書簡型連載も、自分の本編も…

忙しい訳でも、気持ちが落ち込んでいる訳でもありません。書きたいと思うことがなくなってしまったのです。ぎりぎりまで考えていました。でも、やっぱり思い浮かばないのです。それでたどり着いたのが、「1回休み作戦」。1回休んだら、次はどんな気持ちで締め切りを意識するのかな、と思いました。

次は、復活できるような気がします

が…

私の毎日は、朝目覚めて、仕事をして、夜眠るという平和な毎日です。

北海道 フリーソーシャルワーカー

鶴谷 圭一

末娘が今春大学に入学して上京し、ついに夫婦二人暮らしの人生に入った。久しぶりに夫婦で旅行に行こうということになり、夏休みに27年ぶりに香港に行くことにした。夫婦での海外旅行も27年ぶりだ。



香港では日本人幼稚園に2年間勤務していたので、そのあたりの懐かしい場所を巡ろうということになって、記憶を頼りに北角(パッコ)の街をウロウロして、住民しか入れないマンションのエレベーターをスルリと入って、懐かしい幼稚園の入口にたどり着いた。この幼稚園のマンションの27階に住んでいたのだ。

果たして幼稚園はそこに27年前と同じ看板を掲げて存在していた。アポ無しだったがドアを覗くと香港人の事務員さんが居るではないか！トントンとガラスを叩いて開けてもらって、事情を説明し園内(マンションのワンフロア)を見せてもらった。当時270人ほど園児がいたけど、今は60人ほどだそうだ。27年前はイギリス領だったし、日本企業も地下鉄開発やなんかで建築業と金融業をメインに多くの日本人を送り込んでいた。香港は今でもどんどん進化を続け、埋立をして土地が広がったり、トンネルを掘り、新界という中国方面にどんどんと開発を広げているのであちこち工事だらけだ。なのに中国企業がほとんどの仕事を取っているのか、日本人の出る幕はなくなってしまったのだろうか。ちょっとさびしい。

現地香港人の話を聞いても、一日150人の中国人が香港に移り住んできていて、

中国人と香港人の軋轢も強まっているという。そのうち大国に飲み込まれていくのだろうか。

幼稚園の話に戻って、園のパンフレットを見せて頂いたら驚いた！29年前に私たちが赴任したときに今は亡き園長(日名子太郎先生)が設定された教育目標、教育の方法がそのまま記載されていた。私が設定した行事もいくつかそのまま継続されていた。良いのか悪いのか…でも少し嬉しかった。

原 町 幼 稚 園

<http://www.haramachi-kijp>

メール office@haramachi-kijp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

速報

(鶴谷さんからのメッセージ、編集長判断で掲載します。)

今回原稿で使わせて頂いている論文を書かれた井内先生の園、北海道安平町のはやきたこども園の園庭を挟んで向かいの道路が震源地だったそうです。

井内先生は現在FBで発信しながら、子どもたちのケアのためにボランティアを募り奔走しておられます。

現在進行中ですが、災害時の対応が非常に参考になります。

https://www.facebook.com/sei.iu.chi?fb_dtsg_ag=Adz0FEsJf9Tq7FgnH-1fKaWTyh0q_jbnN1zraWxos33bWw%3AAAdyHL8h5eB4M1N_n0O9g119GPrSpx7XP78b6tIBFybY5nA

乾 明紀

「隗より始めよ」という言葉があります。ご存知の通り「大きな事を成し遂げるには身近なことから始めなさい」、「まずは自分自身から始めなさい」という意味ですが、改めてこのことの難しさを証明する事件がありました。障害者の雇用水増しです。『障害者の雇用の促進等に関する法律』には以下のように書かれています。

(事業主の責務)

第五条 すべて事業主は、障害者の雇用に関し、社会連帯の理念に基づき、障害者である労働者が有為な職業人として自立しようとする努力に対して協力する責務を有するものであつて、その有する能力を正当に評価し、適当な雇用の場を与えとともに適正な雇用管理を行うことによりその雇用の安定を図るように努めなければならない。

(国及び地方公共団体の責務)

第六条 国及び地方公共団体は、障害者の雇用について事業主その他国民一般の理解を高めるとともに、事業主、障害者その他の関係者に対する援助の措置及び障害者の特性に配慮した職業リハビリテーションの措置を講ずる等障害者の雇用の促進及びその職業の安定を図るために必要な施策を、障害者の福祉に関する施策との有機的な連携を図りつつ総合的かつ効果的に推進するように努めなければならない。

事業主であり、推進役である省庁や地方自治体が、法律の趣旨とは異なる利益を目指してしまいました。これを奇貨として、社会全体で障害者雇用や社会連帯について見直し、2020年のパラリンピックを迎えたいですね。

三嶋あゆみ

災害の多い日本。災害時の生活保障や避難所対策、医療・福祉対応を国の予算で確保してほしいですね。個人や自治体まかせじゃなく。

川崎二三彦

しばらく休載

研修講師を引き受けると、当日使用するスライド資料はいつも、概ね9割方作っ

ておいて、研修前日に完成させるようにしている。準備が早すぎると、なぜそんな作りをしたか忘れてしまい、研修中に自分で驚き、混乱してしまうからだ。

この日も、翌日の研修に備えて職場で鋭意努力し、どうやら無事終了したのはよいとして、当日朝に確認してみると、作ったはずのものが無い。職場のPCに残してUSBに入れ忘れたのである。幸い5時には起きていたので応急処置はすませたものの、苦心惨憺した元の完成品がほしい。と思った瞬間、閃いた。度重なるミスに鍛えられた私は、こういう時に強いのである。

「悪いけど、私のPCを立ち上げてくれな
いかな。デスクトップ画面の右下隅にある
フォルダーから〇〇ファイルを探して、送
信して欲しいんだ」

若い職員に頼めば、朝9時開始の研修にぎりぎり間に合うのである。だが、無情な返事。

「データが重すぎて送信できません」

自分でも気づかないまま29メガものデータ量になっていたのである。この御時世、やはりクラウドに保存すべきなのだろう。送信作戦は諦め、応急処置ファイルを使った。無念の思いは残ったものの、参加者が何も気づいた風ではなかったのは幸いだった。

というような教訓を生かして、次の研修に臨んだのだが、はたまた悔しい結果になってしまった。



「ジェノグラムを読み解く」というテーマで準備したのだけれど、妊娠記号の意味を説明するところで肝心の記号がスライド上に出てこない。前日の修正でいろいろ触っているうち、何らかの事情で当初入っていた記号が消えたとか考えられない。

「妊娠が家族に大きな影響を与えている

と言いながら、家族図には肝心の妊娠記号がないような報告書もありました」

こんな説明をしたのだが、ふと我が身を顧みれば、まさしくそれを目の前で体現していたのが私自身であった。全く情けない。というような呆け講師活動を続けている今日この頃、諸般の事情で、連載をしばらく休載します。復活するときには、新企画が出るかも知れません。

(2018.08.30 記)